
猫又と俺 4

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又と俺 4

【Nコード】

N6109Y

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

おれは普通の高校一年生。何もかも普通だったのに、化け猫妖怪に居つかれたおれは普通ではいられない。

今度の厄介事は保健の先生からもたらされた……。

『猫又と俺』の続編です。

育ち盛り

「あ、あのこれ……」

「はあ」

目がくりつとしたショートカットの女の子が淡いピンクの封筒を差し出した。

今でもラブレターとかあるんだ……。

なんてことを思っぴっくりしたのは初めの頃だけで。今じゃ見るたびに結構うんざりしている自分がいる。

おれは丘野 孝之、私立高校一年のどちらかっていうと地味な男子だ。取り立てて頭が良いわけでもない。良けりゃあ第一志望に受かってたし、ここの特別進学クラスいわゆる特進に進んでいるだろう。

運動も走るの好きだが球技は苦手という痛いやつだ。ルックスは それこそフツーだと思う。こればかりは自分ではあんまり分らない。

ただし、相当やばいなんて自覚したら朝起きれなくなるチキンハートなので「普通」は譲れない。

そんなおれが贅沢にも女子、それも結構可愛い女子からの手紙を見てなぜうんざりしているのかと言えば。

「で、林に渡せって？ それとも田口？ こういうの、自分で渡したほうがいいよ」

おれはため息まじりにその女子の手元を見た。ま、そういうことだ。この手紙はおれ宛てじゃない。それだけじゃなく、今までのすべてがおれ宛てじゃない。

愛想良くなんてできるわけがないだろう。

「だって林君を目の前にすると何にも喋れなくなるんだもん」

涙目になって訴えられておれはたじたととなる。こういうの苦手だ。おれがいつもつるんでる二人、林はスポーツマンタイプのイ

ケメンで、爽やかな外見で明るくて話しも面白い。だが、すごい助平なんだがそんなことは女子は知らない。

片や、田口は「おまえ絶対中一だろ」というくらいのベビーフェイス。色素の薄い髪や瞳の色も相まって、コアなファンがいるらしいこの学校の幼稚舎からいるお坊ちゃまだ。

目立つ二人に挟まれた凡人なおれは、こうやって日々プライドを傷つけられている。

「渡すだけでいいから」

「お、おいっ」

可愛い女子は脱兎のごとく消えて行つた。すげー逃げっぷりに驚く暇も無い。残された可愛い手紙がやけに眩しかった。

「モテモテだな、丘野君」

突つ立つたおれの後ろからかけられた声に、おれは相手が誰か分かつたが、あえて知らんふりした。

「シカトしないで欲しいなあ」

「おれに構わないでくださいよ、笹井先生」

うるせえよ、おまえにモテモテなんて言われたくないんだよっ。
ふざけんなよ、この狐つきめ。

まあこの悪態はひっそりと心の中で行われたわけだが……。仕方なくのっそり振り向くと、そこにはこれまたうんざりするよくなイケメンが優雅に腕を組んで立っていた。

養護担当の先生、笹井だ。アイドルばりの容姿だがこいつは狐憑きで性質がすこぶる悪い。

関わり合いたくない相手ナンバーワンなのだ。

「そつ言つなよ、ちよつと手を貸して欲しいことがあるんだけど」
嫌です

「まだ言っていないけど、用件」

「い、や、です」

笹井先生の頼みごとなんてろくなもんじゃない。妖怪がらみに決まってる。別におれはそんなことを好きでやってるわけじゃない

い。

危険なことや、面倒なことは断固お断りだ。

第一笹井先生の頼みを聞く義理も無い。こっちがお礼して欲しいくらいだ。この前使役している化け狐が増え過ぎて困ってる先生を結果的に助けてしまったんだから。

それにだいたいこの事はその肩に乗っかってる化け狐にやれせればいい。

横を向いたおれに、ふうんと笹井先生は言いながら肩に乗った狐に何か指図する。すると狐はぴょんと先生の肩から飛び降りてさっきの女子を追い掛けて行く。

「さっきの彼女、急いでたよね。階段とかから落ちなきやいいけど。打ちどころ悪くて骨折とか……どう思う？」

「せんせ、卑怯だぞ」

「たたく、今に始まったことじゃないが、笹井先生は性悪だ。人間の範疇なのが可笑しいくらい妖怪寄りだとおれは思う。はあとおれはため息をついた。

「何すればいいんですか？」

「素直な子は好きだよ」

柔らかい声で笹井先生はそう言うと「黄葉戻れ」と呟く。するとあんなに距離があったのに黄葉と呼ばれた狐が帰って来た。

「じゃ保健室で話そうか、丘野君」

先生は女子なら失神するやつがいるんじゃないかと思うくらいの笑みを浮かべたが、相手はおれなので別に何もおこらなかった。

「気色悪い笑い方止めてもらえます？」

「あれ？ これ必殺のやつだったんだけど」

「おれ、男ですけど」

「そうか、丘野には効かないかと先生はくすりと笑った。つて、今のにヤラレル男子がいるつてのがすごい寒いんですけど？」

保健室の外も中も前は狐がうようよいいたが、今では女子がうようよいる。おれたち、いや笹井先生を見つけた女子がきゃあきゃあ

騒いでる。

「せんせー、どこ行ってたんですかあつ。お昼休み終わっちゃいますって」

黄色い声におれはぎょっとした。

「昼飯まだなのにつ」

くそつ、おれの昼飯。時計を見るともうあと五分くらいしかない。今から学食行ったところで時間切れだ。

嘘だろーっ。気づいてしまってもう腹ペコでおれは動けなくなりそうだった。

「君たち、早くクラスに戻らなきゃ。また、おいで」
にこやかに笑う先生が後ろ手にびしゃんと保健室の戸を閉めた。

ああこういうの、相手がすげー美人の先生だったらエロDVDみたいな展開もあるのに……と心の中でぼやいてみる。

そして……裏切り者は身の内にいた。ぐうぐう遠慮なく鳴るおれのお腹に先生はにんまりと笑う。ほんつとにやなやつだ。

「話し聞いてくれるなら、その引き出しにかぼちのパイが入っているけど」

「かぼちのパイ？」

どうするんだ、おれ。食いもんで釣られるもんかと思う気持ちは、先生が引き出しを開けて皿にのった上手そうなパイを見せびらかした途端に消え失せる。

許せ、おれのプライド。だってまだ育ちざかりなんだ。

「紅茶でいいかな？」

パイを口に詰め込んだまま、うんうんとおれは頷く。
「ある場所にある物を届けに行ってもらいたいんだよ」

なんでそんなにアバウトな説明なんですか、先生。それじゃあ全然説明になってません。嫌な予感しかしないが、突っ込むのは食べてからにしようとおれはパイに齧りついた。

まさか食べ物にプライドを売り渡したつけがくるなんて、善良な高校生には分からなかったんだよ、ちくしょう。

バカバカバカ

カタンと先生が自分のティーカップを皿に戻した。ただそれだけなのに部屋の空気がぐんと変わる。

「じゃ、本題に入りますか」

「ほ、本題？」

「惚けたってダメですよ、丘野君。ここにパイ食べに来たわけじゃないでしょう？」

ソファから立ち上がるうとしたおれは先生に肩を押えられて再びソファに沈んだ。

「ただいま」

「おう、帰ったか孝之」

家に帰ったおれの足に黒猫が纏わりつく。尻尾が二つあるこの猫、実はただの猫じゃない。尻尾が二つあるこの

人語を喋ってる時点で普通じゃないんだが、こいつは妖怪なのだ。化け猫妖怪、猫又という。

「なんだ、暗い顔して。腹でも痛いのか」

「別に……」

猫又相手に言い合いする気にもならず、おれは自分の部屋に入っ

た。
「別につてなんだよ、ああ？」

いつものやくざばりの声を振り切り、ドアを閉めたはずのおれの

部屋のベッドの上に、猫又がいるのを見ておれはがっくりと頂垂れた。

何でいるんだよっ。

人間だれしも一人になりたい時つてあるよな。今、まさにそうなんだよ。思春期の難しいお年頃つてやつだ。そういつ香り、ぶんぶん漂わせてただろ。

そこは気を利かせるとこじゃないのかよ。思うが猫妖怪に相手の気持ちを慮おもんばかれつていつても無理か。

他人同士の共同生活なんてどつちかが我慢ばかりだと上手くいかない。たかられてるばかりのこの生活が共同生活と言えるだろうかとちらりと思う。

が、今後の事もあるし、ここははつきり言おう。

「今ちよつと話しをしたくないんだけど」

言った途端に顔面めがけて猫又の蹴りが飛んで来た。

「わ、わ、分かった。分かったから……ちよつと落ち着こうか」
ベッド横の床に倒れているおれの胸に乗りかかり、前足の爪をによつきり出している猫又に向かつておれはマジで焦っていた。

いつでも手を抜かない。ネズミを相手にする時もゾウを相手にするときも全力でやる、そう公言しているこいつの攻撃は半端無い。だけど学校での話をしたらもつと猫又の機嫌を損ねる気がしないでもない。

「孝之っ」

「わ、分かった。言うからそんな物騒なもん、しまつて」

おれの躊躇も迫る脅威にすぐに翻る。所詮、おれはヘタレだ、悪いかつ。

「笹井先生におつかい頼まれたんだ」

「おつかいだと？」

「う、うん」

間違いじゃ無い、頼まれたのはおつかいなんだから。

「じゃ、そのおつかいの内容を聞こうじゃないか」

「やっぱり聞く?」

言った途端に「シャアツ」と猫又が威嚇の声を上げて、おれは速攻で今日の出来事を喋っていた。

「つまり、おまえは大木の根元にあった祠の中から持っていった鏡を返して来いと言われたんだな」

「……うん」

猫又はハアと大袈裟にため息をついて見せた。猫にため息をつかれるおれって。

「場所は神社だろ」

「……そうだけど」

おれの返事に猫又の口が『バカバカバカ』と言っている。声は出ていないがそれはしつかり分かってしまった。猫の言いたいことが分るおれ。でも全然嬉しく無い。

「その大木つてのは杉か樺。いずれにしてもご神木だな。それは御霊代、または依り代とも言われている神だ。そこに収まっている鏡つていやあ……」

ああと猫又はおれの体から飛び降りた。

「魔を避けるために埋められていたその魔鏡を使ってあのくそ狐憑きが何をやったのか知らんが、孝之おまえ簡単に返してくりゃいとでも思ってるのか?」

神社に忍び込んで鏡を元に戻す。面倒くさいことだが今晚にも行つてこようと思っていたのに、猫又の言葉にどんどんやりたくなくなってくる。

「えと、それって危険かな」

「バカ野郎、死ぬぞ」

死ぬ……んですか。カボチャで一つで自分の命を差し出したおれ。うっそ、冗談だろ?

「鏡で魔を跳ねのけていたくらい力が集まり易い場所だったところだぞ。鏡がどれだけ無かったのかは知らんが俺さまならそんなところには絶対寄りつかん」

「か、神さまなんだから……人に危害なんて」

言った途端にまた猫又が『バカバカバカバカ』と口を動かす。

ああ、もうこんなこと分かりたくない。

「ここで言う神は仏教とかキリスト教とかそういうものの神とはまったく別のものだ。この国は昔から自分たちの力の及ばない物を『神』として祀ってきた。当然、慈悲深いなんてことはない」

猫又が目をきゆうと細くした。

「孝之、荒ぶる神って知ってるか？」

「あ、あらぶる……」

とんでもないことに巻きこまれてしまったとおれはそのまま頭を床に打ち付けた。

殺傷石

「し、死んじゃう?」

「ご愁傷様」

ここは慰めるために嘘つけよ。正直者なんて大嫌いだつ。

「おい、寝てる場合じゃないだろ」

柔らかい肉球がふにっとおれの顔を踏む。確かにそうなんだけど、死ぬとか言われてやる気になれというほうが無理だろ。

こつなつたらやりたいことをやり尽くし、旨いもん食いまくって死にたい。そして辞世の句はこうだ。

「気をつける、暗い夜道とカボチャパイ」

つい口をついた言葉に猫又の大袈裟なため息が聞こえた。

「辞世の句のつもりか、孝之。それはな、標語だ。やっぱりおまえは底なしのバカだな。いいからパソコンを立ち上げる。神社を調べらんだ」

猫又の言葉におれは驚いた。だって妖怪とパソコンってなんか合わない。

「猫又つてパソコン知ってるの? って、痛えっ」

飛び上がっておれの頭を足がかりにした猫又は、さっさと机の上に行くとおれを見下ろした。

「俺さまをバカにするなよ。パソコンくらい知ってる」

へええ、最近の妖怪って結構ハイテクなんだ。スマホとか操ってたら笑えるよな。そんなことを考えていたらシャーペンの芯が手の甲に刺さった。

「うわあああああつ?」

「余裕あるじゃないか、ニタニタ笑いやがつて」

「しゃ、シャーペン……えええ?」

尻尾でシャーペンを器用に巻きつけているのはいいが使い方が違うと言いたい。たかがシャーペンの芯とはいえ、手の甲にめり込

むと切ないほど痛い。

「痛いんだぞ」

「知ってる」

そーかよ。

いててと言いながらパソコンを立ち上げると、好きなゲームのキャラクターの三頭身イラストが画面に現れた。

へっという猫又の声を聞いたような気がするがもう無視するしかない。

「堅州国神社……ってここだ。あつたよ」

小さい神社らしく地図に印しかない。遠くだとやだなあと思っていたが案外近い。これなら自転車で三十分くらいで行けそうだ。中学生や、高校生男子にとって足と言えば自転車だ。二時間以内なら自転車の行動範囲内といえる。

だが、ほっとした俺をよそに、名前を聞いた猫又の様子は違った。

「堅州国って言ったよな」

うつむと机に置いてあるパソコンの前で佇む猫……不思議な絵面だ。

「堅州国かたすくにってのは根の堅州国からきてる。それは黄泉のことだ。そして神木の根元の小さなお祠の中にあるのはおそらく殺傷石だ」

「さっしようにせき？」

「ああ……その力を封じ込める目的でその鏡を上うへに置いていたのかもな」

それで？

そういった顔をおれは猫又に見せていたのだろう。無言のおれに猫又は呆れたような仕草を見せた。

「今の聞こえてたか、孝之」

「聞こえてたけど、さっしようにせきの意味分かんねえ」

「そーか」

猫又がごろんと横になった。尻尾がふりふりと揺れている。もしかしてもうどうでもいいやとか思ったのか？

「なあ、教えてくれないの？」

「知ってどうする？　ますます行きたくなくなるぞ」

猫又に言われておれは椅子にがたと座り込んだ。頭をわしゃわしゃかき混ぜてみたりしたけど何か良い案がぼつと浮ぶ。なんて事は無かった。あるはずない、そんなことできるんなら定期テストで毎回悩まない。

「あんたって子は、返ってきたテストを親に見せる前に何で今回の敗因は、とか言うのよっ」

予防線張ったつもりが、張ってることで怒られてしまった……って、今何考えていたんだっけ？

ああ……鏡だったよな。

行きたくない。行かなくていい？　だってあの女子を知っているわけじゃないし。酷い事っていったって、まさか死ぬなんてことはないだろう？　笹井先生だって人殺しまではしないよな。だったらおればっかかり命かけるのってどうなんだ？　知らんふりしたっていいだろ。

「ああああっ、おれってなんてひとでなしなんだあつ」

叫んだところでどうにもなりはしない。そんな事分かってるけど叫ばずにはいられなかった。

だってやっぱ怖いじゃないか。笹井先生が誰かに行かせようとしたのはこういうことだったのか。単なるおつかいだと思ってたおれは猫又の言う通り、本当にバカだ。

それでも自分の身を守るために他人を見殺しにする冷徹さもおれには無い。どっちにも行けず、その場でおろおろしているだけ。

項垂れるおれの横で猫又が何か言った。

「……ってことだよな」

「は？　何？」

転がっていた猫又が勢いよく起き上がる。

「この殺傷石は妖怪のなれの果てだ。ってことはだ。鏡の無い今、そいつは人に害を与えている」

「ま、まあ……」

あんなちっぽけな神社にそうそう人は行かないだろうけど、近づけば何かと障りがあるのは間違いないだろう。

「よっ」と声を上げた猫又が机の上から綺麗な弧を描いて飛び降りた。で、やけに楽しそうな声が部屋に響く。

「って、ことは……この美少女妖怪、猫又さまに任せろ」

猫又はいない

やっぱ、それですか……。

「石、やつつけるのかよ？」

「もちろん」

そこには、目付きの鋭い花柄のワンピース姿バージョンの猫妖怪が腰に手を当てる大きく足を開いて立っている。

「そんな曰くつきの妖怪を退治してみる。どんだけ徳を積めると思うんだ。ここは俺さまが、その石に隠れてやがる妖怪をぶつ殺してやる」

猫又がやる気になったのって、そこ？

ふんつと大きく息を鼻から出した猫又に若干がっかりしたおれだった。いや、純粹におれを助けたいと思って……とは思わなかったけどさ、ここは少し嘘でもいいからそんな事を言っただけ欲しかった。「おい、何たそがれてるんだ、孝之。あの狐憑きから預かった物を持って来い」

「うん」

預かった文箱は漆塗りで思ったより軽い。上の箱との境に札が貼ってあった。これを剥がせばいいのか？

「孝之、止め……」

びりつと破った途端に勝手に上の箱が飛んで白っぽい光が目を焼いた。

「うわああっ」

あまりの痛さに暫く目が開けられない。

目を怪我した？ ときどきしながら薄目を開けるとちかちかはするが何ともなっていない。思わず胸を押えて猫又はどうなったのかと探すが猫又の姿はどこにも無かった。六畳の部屋だ、そんなに死角があるはずも無い。

「猫又？ どこ？」

椅子の下やベッドの上、クローゼットの中。　ともかくどこにも猫又はいない。

「なんなんだよ。俺さまに任せろなんて言ったくせに」

何が何だか分からないまま、おれは一人になってしまった。　がつくりとその場に座り込んで、何の気なしに箱に収まっている鏡を取り上げてみる。

燻された鈍い光を放つ銀色の手鏡。　おそらくそんなに古いものじゃない。　それにどんな力があるのかおれには分からなかった。　だって、

だって教えてくれるはずの猫又がいない。

「おれ一人で行けっというのかよ」

おれの文句に誰の答えもツツコミもない。　一人になったと思いき知らされて一人ひっそりと落ち込んだ。

それでもおれは、

おれは行かなきゃ。

ため息を何回もついた。　そこら中壁や椅子やドアを蹴って、大声を上げまくった。　そんなことしたって何も変わらない。　知っているけど止まらなかった。　ひっくり返った部屋を眺めておれは納得したかったんだと思う。

どこかでいつも猫又をあてにしていた。　助けてもらえること前提で。　今回のことだってバックボーンに猫又がいるから受けたよ。　うなもんだ。

後ろだて　そんなもん、あつという間に無くなるんだ、今みたいに。

「行くか」

鏡をおれは斜め掛けした鞆の中に押し込み、自転車の鍵を引き出しから取り出した。　懐中電灯を探し当ててカーゴパンツのポケットに突っ込んだ。

めちゃくちゃ行きたくないけど。　誰かが止めていいと言ってくれたら速攻止める。　そんな思いで……それでもおれは家を出た。

携帯に入れた地図を頼りに自転車を漕ぐとあつと言う間に神社に着く。こんな近くに近くにあるのにおれはまったく知らなかった。

まあ、目の前にあったとしても見えて無かったかも。それほどおれには縁遠い場所だった。鎮守の森と言えば聞こえはいいが、なんだかただの造成途中でほったらかしになっているだけみたいな雑木林が続く。

脇に自転車を立て懸けて上着のポケットを探る。懐中電灯を取り出してスイッチを入れると、そこだけ丸く切り取ったかのように明るくなった。小さい神社だと思っていたが歩いていくと結構奥深い。足元の石が歩きたびに大きな音を立てて、ここに侵入者がいると教えているようだった。

ざくざく……ざくざく……もうどう足を動かしても音が鳴る。
「くそっ」

もうやけくそ気味におれは走った。足元の石が弾け飛んで木の幹に当たって落ちる。急に走ったせいかなんだか気持ちが悪くなつてきておれは立ち止って胸を押えた。

おれってどこまでもヒーローになれないやつだ。現場に行く前に疲れ果ててるってどんだけ運動不足なんだよ。

「き、気持ちわる……」

膝に手を置いて顔を上げると、何かがおかしいことに気づく。

今日は満月だ。周りに照明がまったくなくとはいえ、こんなに墨を溶かしたみたいに都会の夜が何も見えなくておかしくないか？ 真っ暗という言葉の次に来るような闇に見覚えがある。

漆黒の闇　　去年の夏、確かにおれは同じ闇の中にいた。思い出したら腕からゾワリと寒気がうなじへそれ自体が生きもののように這い上がってくる。

似ている。闇の気質……そんなものがあるとしたら、これこそがそうだ。明らかに悪意を含んでいる暗闇。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6109y/>

猫又と俺 4

2011年11月22日03時16分発行